

## 「日記の総合的研究」『The Synthetic Researches of Japanese Diaries』に向けて

倉本 一宏

人は何故、日記を記すのであろうか。言い換えれば、日記を記すことによって、日本人はいつたい、何を得ようとしていたのであろうか。

文学者たちは何故、日記という形式を用いて、自己の作品を世に問うたのであろうか。さらに、貴族たちは、何故にあのような膨大な日記（古記録）を記し続けたのであろうか。

本研究においては、日本史学（日本古代史・中世史・近世史・近代史・文化史）、日本文学（日本中古文学・中世文学・近代文学）、そして心理学（臨床心理学を含む）、それぞれの分野における第一線の研究者を一堂に集め、研究会における議論を集積することによって、日記と日本人との関わりを、総合的に究明しようとするものである。

それぞれの記主の立場と記載目的、記述の内容と意義を読み解きながら、時代の特質と変化、また作品の本質を探り出し、さらには

「日記」と呼ばれるものの分類や、その評価、享受史の観点など、既往の研究を超える角度からの解明も行ないたい。

その際、単にそれぞれの研究員が、自分の専門分野とする古記録（あるいは作品）に関する研究発表を行なうのみではなく、たとえば一つの古記録を題材として、異なる分野の研究員が、複数の研究発表を行なえば、どのような化学変化が生じることになるのか、本研究は、そのような実験的な試みをも、視野に入れている。

たとえば、ある古代の古記録について、政治史・社会史・経済史・宗教史など、さまざまな得意分野を持つ日本古代史の研究員による研究発表を行なうのみならず、これを日本中世史の研究員が読んでみれば、自分が日常的に読んでいる中世の古記録と比較するという方法から、新たな視点が発見できるであろうことは、言うまでもない（日本近世史・日本近代史の研究員についても同様である）。

また、日頃は仮名物の女流日記文学を読んでいる日本文学の研究

者が、男性貴族の記録した古記録を読んで研究発表を行なえば、逆に普段は男性の記録した古記録しか読んでいない日本史学の研究者が、女流仮名日記を読めば、どのような影響を受け合うのか、きわめて興味深いところである。

さらに、特別に心理学の研究者と臨床心理学の研究者を共同研究員として招請する。この分野の研究者が、古記録や日記文学を心理学的、臨床心理学的に解明すれば、どのような成果が得られるのであろうか（将来的には、精神医学の研究者も招きたいと考えている）。もちろん、古記録の読解は、きわめて高度な専門知識と習練を必要とするが、現代語訳や注釈書の出ている古記録を題材とすれば、このような異分野の研究者による研究も可能となるはずである。

なお、将来的には、中国や西洋の日記との比較という視点も視野に入れている。

これらの研究発表のもたらす成果は、お互いにとつての知的刺激となるのみならず、それぞれの得意分野においても、必ずや有益な体験となり、新たな研究成果を生み出す契機となるであろうことを予測している。

三年間の研究期間の間、毎年、中間報告的に『日本研究』に研究論文を投稿した後、四年後には複数の論集を世に出したいと考えている。また、機会があれば、シンポジウムの開催も計画に組み入れたい。どのような論文、どのような論集、またどのようなシンポジウムを世に問うことができるのか、現時点では予想もできないが、

日本文化の発展に関して、画期的な成果が得られる可能性を秘めた研究となり得るであろうことを述べておきたい。

というのが、当初の共同研究の計画であつた。ちなみに二〇一〇年度は、

初年度は、研究組織構成員全員の研究を確認し合うことによって、共同研究の全体像を定めることを目標とする。それによって、共同研究の方向性や最終目標を見極めたい。

六回の研究会において、全員が研究計画を発表することを計画している。各回八〜十人（第一回の初日は打ち合わせ、二日目は全員が直接史料を見る必要があるため、陽明文庫の史料調査とする。また第六回の初日は打ち合わせとして、二日目に六人）の研究発表を行なうことになる。

という計画であつた。要するに将来に向けての「顔見せ」ということである。

共同研究というものがどのようなものであるかわからないまま、ともかくも暗中模索で、日記に関係のありそうな研究者にメールを出し、研究会への参加を呼びかけたところ、ほとんどの方が参加を承諾してくれた。改めて日文研共同研究のすごさを思い知ったわけであるが、十名くらいでスタートしようとした当初の目論見は

もろくも崩れ、初回から第一共同研究室（「夢殿」）を使用するという大所帯となってしまった。

しかもありがたいことに、前年度の他の研究会の平均出席率である四十九%をはるかに超える出席率で、瞬く間に研究会予算を消化してしまった。こちらはこれも二〇一〇年度から就任した共同研究委員長として、補正予算を申請するという失態を演じることとなつてしまったのである（共同研究会を開いたことのない者を共同研究委員長に就けるというのも、日文研のすごさであろう）。ただしこれは、他の研究会の前年度の平均出席率を基準にして予算を配分するという方式に問題があるものと考えている。

さて、いざ研究会を始めると、さすがは日本を代表する日本史学・日本文学・心理学の日記研究者を一堂に集めて研究発表を行なったこともあつて、活発な議論が戦わされた。初年度は「顔見せ」を予定していたにもかかわらず、皆さん「本気」の発表をなされて、毎回、予定していた時間を大幅に超過する結果となった。大いに楽しんでいただけたのは、ありがたいことである。

その一方では、日文研の共同研究のキモである、学際性と国際性、特に後者については、いささかの問題を残すこととなつてしまったこともまた、否めない事実であろう。元来が古記録という歴史史料が日本独自のものであり、それを専門に研究している最高峰の研究者を集めているのであるから、このような結果になるのも、よく考えれば当然なのであった。二〇一一年度からは外国人共同研

究員も参加してくれるが、この方面の発展が、今後の課題と言えるであろう。

こういったわけで、二〇一〇年度には合計四十本の研究発表を行なった。各回に発表を行なった方の名前と、発表題目は、以下の通りである。

#### 第一回研究会（二〇一〇年五月八日・九日）

打ち合わせ・自己紹介・発表順決定・研究会目標設定

史料調査（陽明文庫）『御堂関白記』自筆本・古写本・予楽院本、

『栄花物語』

#### 第二回研究会（二〇一〇年五月八日・九日）

松蘭 斉「中世人と日記―その発生をめぐって―」

板倉 則衣「古記録から見える儀式観―斎王卜定を中心として―」

三橋 順子「『台記』に見る藤原頼長のセクシュアリティの再検

討（序説）」

井原 今朝男「日記にあらざる古記録―日記抜書・古文書・書面・

帳簿類をまとめた「申沙汰記」―」

磐下 徹「日記と指図」

有富 純也「清涼殿の出入方法」

倉本 一宏「『御堂関白記』自筆本の裏書について」

近藤 好和「儀礼にみる公家と武家―『建内記』の事例から―」

第三回研究会（二〇一〇年七月十七日・十八日）

池田 節子『『紫式部日記』・『栄花物語』・『御堂関白記』の比較

検討」

末松 剛「儀礼運営における故実情報の往来―儀礼・故実史料としての書状―」

上野 勝之「古記録における宗教習俗の記載」

荒木 浩「『日藏夢記』の「具迎來僧侶五箇人日記也」について」

石田 俊「勸修寺家文庫における日記」

森 公章「遣外使節と求法・巡礼僧の日記」

門脇 朋裕「盛岡藩家老執務日誌からみた幕府法の施行状況―生

類憐み令を中心に」

鈴木 貞美「『日記文学』とは何か」

藤本 孝一「日記は第一次史料か―『明月記』卷子本の継なぎ方

―」

第四回研究会（二〇一〇年十月二十三日・二十四日）

中町 美香子「『清解眼抄』にみる空間意識」

吉田 小百合「記録から物語へ―『小右記』長徳二年から長保元

年の記事をめぐる」

榎本 涉「日記と僧伝の間」

シャバリナ・マリア「撰関記における有職故実の相伝に関する一

考」

富田 隆「日記の心理分析における認知的不協和理論の応用」

中村 康夫「日記について」

山下 克明「陰陽家安倍氏の記録」

西村 さとみ「故実・先例と時代認識」

第五回研究会（二〇一〇年十二月十八日・十九日）

下郡 剛「『玉葉』と『兵範記』」

吉川 真司「『類聚世要抄』概観」

上島 享「仏教史を語る時代の到来」

尾上 陽介「日記翻刻の問題点」

横山 輝樹「日記から探る江戸幕府武芸奨励」

畑中 彩子「日記に見る『叙位』への関心」

蘭 香代子「日記に表現される無意識の心理について―御堂関白

記における雨の記述を中心にして―」

第六回研究会（二〇一一年二月十九日・二十日）

佐藤 全敏「宇多天皇日記について」

古藤 真平「『政事要略』阿衡事所引の「宇多天皇御記」―その

基礎的考察」

名和 修「『御堂関白記』古写本について」

佐藤 泰弘「『京大本兵範記紙背文書』について」

吉川 敏子「藤原道綱の評価―古記録の主観と客観」

久富木原 玲「一三、一四世紀の日記―一人称かな日記の成立に

ついて」

曾我 良成「『心』の記録としての日記―喜怒哀楽、花鳥風月、

羨望・嫉妬――

小倉 慈司「禁裏本と書陵部蔵書」

これらはどれも現在の日本の学界における最高レベルの研究成果であり、将来、この分野を研究する研究者にとって伝説となるであろうことは言を俟たないが、その成果のすべてを論集として出版することも、昨今の出版情勢を勘案すると不可能であることは間違いない。そこで『日本研究』の誌面をお借りして、毎年、研究発表の一部を世に出そうと企画するものである。